
南国の鳥

久地加夜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

南国の鳥

【Nコード】

N4112U

【作者名】

久地加夜子

【あらすじ】

大切なものをなくしても、芽生えた愛情は消えないもの

（前書き）

第十二回文学フリマで無料配布本に掲載した小説です。
原稿用紙15枚で収めることに努めました。

「君の声、低く澄んで通る声ね。バスっていうのかしら、よくわからないけれど」

活気に満ちた飲み屋で一人カウンター席に座り酒を飲んでいた僕は、不意に声をかけられ驚いた。振り向くと黒いショートカットにシルバーのネックレスをした少しきつめな印象の女性が、半ば空いたカクテルを持ってこちらを見ていた。確か名前は万里。少し酒臭い。

「そうなのかな、僕もよくわからないけれど」

とりあえず相槌程度に返事をする、万里は空いていた隣の席に座った。僕の食べているつまみに手を出すと、僕のグラスを見て店員を呼んだ。

「私にもこれと同じものちょうだい」

他に数品、メニューも見ずに追加注文すると、持っていたカクテルを一気に飲み干した。カツンとカウンターに置かれたグラスから水しぶきが跳ね、弧を描いて万里の細い手まで飛ぶ。僕の後ろの席では酒に酔った男が女に言い寄っている。出入り口付近では携帯で話をする若い女がしきりと腕時計を眺めている。

ここはひどく騒々しい。急なキャンセルが出たとかで人数合わせで渋々参加したサークルの合コンだが、やはり来なければよかった。僕はトイレに立つフリをしてさっさと帰宅しようと考えた。タイミングを見計らって誰にも知られずに帰ろう。家に帰ってレンタルしたばかりのホラー映画が見たい。

「さっきの歌、うまかったわよ。みんなびっくりしていた」

万里はにやりと笑うと、僕のつまみにまた箸をつける。わりと酔っているのか、時折ふうと吐息を漏らすと横に揺れた。

「あれしか歌えないんだ」

僕は目を合わせないように話すと、ぬるくなった黒ビールを一口

飲む。

「ねえ、こつち見て話さないよ。女性が苦手なの？ まさか童貞でもあるまいし」

唐突にあられない言葉を言われ僕はびくりと反応した。彼女はしまった、というような顔をしたが、すぐにまあいいかともいうような表情になる。よく表情の変わる女だ。顔が疲れやしないのだろうか。

「珍しいわよね、君がサークルに顔出すなんて。彼女いないんでしょ？ 寂しくなったの？ やっぱ彼女の一人や二人、欲しいわよね。君みたいに太つても彼女できるかもしれないよ、だって若いんだもの。クスクスス」

彼女は矢継ぎ早に言葉を繰り出してくるが、そのどれもが僕の心をえぐるものばかりだった。これほどまでに他人を傷つけてもなお、本人は傷つけている自覚がなさそうだ。一種の才能かもしれない。むしろ哀れに思える。僕はあからさまに不機嫌な顔でつつけんどんに返す。

「ほっておいてくれ」

「なによ、そんなだからもてないんじゃない。せつかく声をかけたのにさ」

彼女が膨れる。

何を物好きな。サークル内で一番印象が薄く空気のような僕に、声をかけるのはかなりの物好きだ。別段かつこよくもなければとりえもない。やや太り気味の体をもてあまし、二十代前半だというのは頭の薄さを気にし始めているような男だ。このサークルだって友達に無理やり連れてこれなければ入ってなどいない。

ちらり、と傍らを見れば、サークル入会当初は女性相手に声もかけられなかったあいつが、今では女性たちと笑いあいながら写真を撮っている。

僕はため息をついた。

自分の何かが変われるような気がして今まで入っていたサークル

だが、もう辞めよう。やっぱり僕には合わない世界だったんだ。僕は立ち上がると、そのまま帰ろうとした。

「お待ちどう様です、黒ビールとソーセージの三種盛りです」

店員が明るい声であらわれ、つまみと黒ビールを置いていく。彼女は「乾杯！」と僕の半分空になったグラスに勝手に合わせる。チンと軽い音がして、彼女は一気に黒ビールをあおった。「やっぱり冷たい黒ビールは美味しいわよねえ」というと、ソーセージを一本かじった。彼女は立ち上がった僕を不思議そうに見上げると、「どうしたの？ 座ったら？」と椅子を勧めた。僕は出端をくじかれずとんと座る。

「ねー、君は大学卒業したらなんになるの？」

唐突に聞かれ僕が言葉を濁していると、

「声優とかどう？ すごいきれいな声だし。オタクなんでしょ？」

いろんな漫画いっぱい持つてるって聞いた。なんかエッチなポーズしてる人形とかもいっぱいあるって」

僕は黒ビールを噴き出しかけた。どこから流れた情報だ。

「その声を生かしなさいよ、わりといけると思うよ」

僕は生返事をする。黒ビールを飲んだ。もうほとんどない。

「聞いてて心地いいもん」

万里の表情はわからないが、茶化している感じではない。僕は恥ずかしくなって俯いた。早くどこかにいけばいい。

「ねーねー、万里、一曲歌つてよ」

サークルの仲間が万里に声をかける。彼女は「えー、なんでもいい？」と言いながらも急いで曲を探す。目当ての曲が決まっているのか、迷いなく探し出すと、慣れた手つきで番号を入力する。

「私の歌声聴いて惚れるなよ！」

彼女は立ち上がると、マイクを持って叫んだ。みんなは口笛を吹いたり拍手したりして彼女をはやし立てる。僕はそっと視線を上げ彼女をのぞき見た。彼女はすっと背を伸ばし画面を見つめていた。笑ってはいるがまっすぐな視線には迷いがない。彼女のその自信は

いったどこからくるのだろう。僕はうらやまくなって、また視線を手元に落とした。

ほどなくして音楽が流れ始めた。最近テレビでよく流れているCMの曲だ。青空を連想させる心地よいリズムは僕でさえ知っていた。僕はまた万里を見た。

彼女は一瞬にして表情を変えると、恋の歌を歌い始めた。

そこだけ南国が広がっていた。青く高い空と、地平線から湧き上がる真つ白な雲。深い緑の森には豊かな水量の川が流れ、時折魚が飛び跳ねる。鮮やかな色彩の蝶が二匹絡み合うように舞いながら、花々の中を飛んでいる。遠くからスコールの匂いがしたような気がしてはつとすると、万里の歌は終わっていた。

万里は拍手の中席に座ると、一気に黒ビールを流し込んだ。

「歌ったあとのお酒は最高ね！ 喉に沁みるわ！」

僕は呆然としたまま彼女を見ていた。それに気づいたのか、万里は僕に笑いかけた。

「私あの歌好きなのよ、いい歌よね」

「いい声だね」

僕の口から自分でもびつくりする言葉が出た。

彼女はにつこり笑うとまた黒ビールを流し込んだ。店員を呼んで二杯追加を頼む。

「あらありがと。褒めても何も出ないわよ」

僕もつられて笑う。

「君の声は南国にいる色鮮やかな鳥の歌声のようだ」

まるで詩人ね、というと、ちょっと表情を曇らせて僕に問いかける。

「ねえ、もしかして騒々しいってこと？」

彼女が眉をひそめて顔を近づけるので、僕は少し笑ってしまう。まるで子供のようだ。

「いいや、美しいということだよ」

柄にもないことを言った！ 笑われる！僕は恥ずかしくなつて

慌てて視線を落とす。見ると自分の手が真っ赤に染まっていた。ふと視界に彼女の手が見えた。おずおずと視線を上げると、彼女は耳まで真っ赤になって俯いていた。

「う、美しいとか、よく言えるわね、褒めたって何もでないんだから！」

そういつと店員が持ってきた黒ビールをどんと僕の目の前に置いた。万里は自分の黒ビールを一気飲みすると、きつと僕を睨み付けた。顔が真っ赤だ。

僕は先ほどまでとうって変わった彼女の様子に、そのギャップに、一瞬にして虜になった。彼女の声で僕の名を呼んで欲しい。僕のはで笑って欲しい。その美しい声は、どんな表情を見せるのか、もっと知りたい。

僕は人生で初めて、自分から女性の手を握った。

そこで僕は目が覚めた。時計を見ると午前六時をまわったところだ。右手には万里の手を握った感触が残っている。あとき彼女はどんな反応をしたのだったか……。たしか酷く慌てて取り乱していた気がする。何杯もビールを飲んで、酔ったのか恥ずかしいのかわからないほど真っ赤になっていた。でも僕の手を振りほどこうとはしなかった。笑ったり怒ったりと忙しく表情を変える彼女を思い出すと、自然と顔がほころんだ。

それが妻・万里との出会いだ。

久々にすっきりとした朝を迎えた。ここしばらく疲れ果てて倒れこむように床に就いていたから、夢を見たのは実に数ヶ月ぶりだ。

僕は起きあがると、隣の部屋で寝ていた娘を起こした。まだ眠そうな娘と一緒に簡単な朝食をとると、二人で家を出る。

早朝だというのに外はすでに夏の日差しだった。昨日まで降っていた雨はすっかり止み、道のそこかしこに水溜りができていた。娘

ははしゃぎながら水溜りを飛び跳ね、真新しい長靴を濡らした。水溜りに照りつける日差しが反射して目が痛い。

僕は娘に麦わら帽子をかぶせると、娘の手を引きながら通いなれてしまった道を今日も歩く。

あれから僕は声優を目指した。大学を中退し親を説き伏せ専門学校に行った。卒業するころには、脇役ながらも仕事をもらえるようになっていた。僕は有頂天で万里と結婚すると、小さい新居を購入した。万里と僕と子供たちと過ごす未来。僕の描く夢はばら色のはずだった。だが現実はそのなにごとに甘くない。ずっと脇役ばかりでこの歳までできてしまった。どうも僕は演技がうまくないらしい。

僕は何度か声優を辞めようと思った。娘もでき、生活が苦しくなってきたからだ。それでも彼女は声優を続けるように勧めた。出会った頃と同じ黒ビールを飲みながら、「私はあなたの声が好きなのよ」と。仕事が終わったあとも深夜までバイトをし、休日は僕の本合わせに付き合ってくれた。彼女は憎まれ口を叩きつつも僕を励まし続けた。酷く疲れていても、最後にはいつも笑う彼女。

病院に着いた。見慣れた看護婦に挨拶をすると、病室に向かう。

歌が好きで酒も煙草も好きだった妻。僕の方まで働きながら、頑張りすぎて倒れてしまった。喉頭癌だった。気づいたときには進行が進んでいて、彼女は声を失った。聞く者すべてを魅了した美しい歌声は、永遠に還らない。

病室に入ると、白い世界で彼女は一人横たわっていた。目を閉じている。喉には包帯が何重にも巻かれており、その白さが痛々しい。僕は彼女に繋がれた様々な機械や体温表に目を通したのち、そっと頬に触れた。ほんのり温かい。僕は胸をなでおろした。今日も彼女は生きている。

僕はいつものように椅子に座ると、絵本を取り出した。娘もならって椅子に座る。今日は「百万回生きたねこ」。娘のリクエストだ。僕はページをめくると、ゆっくりと読み上げ始めた。静かな病室に僕の声が緩やかに響く。

ふと膝に何かを感じて視線を上げると、彼女が目を覚まして僕の膝を撫でていた。僕と目が合うとにつこりと微笑む。彼女は右手を上げて娘の頭を撫でるしぐさを見ると、娘は「まま！」と叫び嬉しそうに擦り寄った。僕も彼女の頭を撫でる。髪が少し薄くなったような気がする。抗がん剤のせいかもしれない。僕の様子に気がついたのか、彼女は紙とペンを取り出すと、「あなたと同じくらい薄くなったでしょ」と書いた。見るとにやりと笑っている。相変わらず口は減らないな君は、と、僕は苦笑した。

喉頭癌は轉移しやすい。リンパに乗りやすい場所にあるからだ。妻はまだ轉移していないはずだが、長い入院生活で少しやつれたかもしれない。

彼女はまたなにがしか書きはじめた。手渡された紙には「お酒が飲みたい」。君はまったく懲りない人だな、と僕が笑うと、彼女も笑った。「本当は煙草も吸いたいだよ」。本当に懲りない。僕は彼女の額を軽く小突いた。「歌いたい」。僕は言葉に詰まった。たまたま彼女から視線を反らす。できることなら歌わせてあげたい、僕の分まで。

歌えなくなった鳥は、どうなるのだろう。飛べなくなった鳥と同じかもしれない。思考が黒い渦を巻き始めた。これ以上考えたら辛くなる。僕はかぶりを振ると、「煙草もお酒も歌もしくは駄目だよ」と少しおどけて言った。「喉に悪いからね」。彼女は少し寂しげに笑うと、こくりと頷いた。

しばらく筆談で会話していると、彼女は疲れたのかうとうとし始めた。まどろみながらも彼女は軽く僕を突くと、「絵本を読んで」と合図をした。僕が絵本を読み上げ始めると、彼女は静かに目を閉じた。少し微笑んでいる顔が、きれいだ。

君はよく笑いよく怒る人だった。子供のような人だった。結婚してからも相変わらず憎まれ口ばかりで、僕は時々辟易した。

でもいま君は、病床で僕の絵本を聞き、微笑んでいる。

時折意識が混濁する曖昧な世界の中で、僕の読む絵本には反応を

返す君。

僕がまだ小さかった娘に読んで聞かせているときも、家事をこなしながらさりげなく耳を傾けていた君。

娘が彼女の手を握った。彼女はうつすらと目を開くと、僕と娘に微笑みかける。少し目が潤んでいた。僕が彼女の頭を撫ぜると、彼女は唇をゆつくりと動かした。

南国の鳥が歌っているような美しい声が、聞こえたような気がした。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4112u/>

南国の鳥

2011年6月27日19時25分発行